

Ⅲ 花き

実況

1 キク

奥越地区では、日量数箱の出荷があり、価格軟調。11月いっぱいに出荷は終了見込みである(11月19日現在)。露地小ギクでは、「さおり」、「あいり」が出荷されている。JAテラル越前キク部会の親株ハウス定植は10月30日、古株切りが11月30日に行われた。

坂井地区では、「雪まつり」等(写真1)の寒菊は草丈70~80 cmで11月上中旬から開花。秋植えキク用の苗は圃場への定植が完了した。来年度の春植え夏秋キクについては、親株の仮植えが始まっている。

病害虫としては、あわらし田中中の圃場で、リゾクトニアによる葉枯が中発生、城の圃場で一部にアザミウマの食害が見られる。



写真1 雪まつり

福井市二日市町の黄色系小ギク「千福」は、11月15日調査(昨年11月16日)で、草丈79 cm、蕾径11 mm(昨年草丈101 cm)で収穫初期である。

二州地区の11月咲露地ギクは、11月16日調査(昨年11月17日)で、「花の里」、「金うさぎ」は収穫中であるが、台風による灌水被害で、草丈は例年より短くなっている。

秋植えの6、7月咲キクは、9月24日から定植が行われた。

若狭地区の11月咲電照作型では、「おちば」は草丈99.4 cmで立弁(昨年草丈58.0 cmで開花期)、「白馬」は草丈104.6 cmで開花期(昨年94.8 cm、開花期)、「かおり」は収穫終了(昨年草丈97.0 cm、開花終期)であり、昨年より開花が早い。

病害虫として、ヨトウムシ類、オオタバコガ、ハダニ類が少発生している。

7月中下旬定植の寒ギクについて、11月16日調査(昨年11月17日調査)では、「冬一番」で草丈94.2 cm、蕾径6.5 mm(昨年草丈85.4 cm、花蕾径6.9 mm)、「寒桜」で草丈90.6 cm、蕾径4.9 mm(昨年草丈72.2 cm、蕾径4.3 mm)、「新年の美」で草丈88.8 cm、蕾径5.2 mm(昨年101.6 cm、蕾径2.8 mm)で、生育は昨年よりやや早い、生育のばらつきが大きい。

病害虫として、ヨトウムシ類、オオタバコガ、ハダニ類が少発生している。

2 スイセン

越前町の露地季咲き栽培の生育は、11月6日調査で花茎長9.5 cm(昨年11月8日で11.1 cm)であった。促成栽培では10月10日から、季咲き栽培では11月10日から出荷開始されている。

促成栽培を含めた現在までの出荷量は2万本であった（昨年11月20日現在で9.4万本）。

3 ユリ

坂井地区では、9月21日に定植された「ブラックアウト」が草丈65 cm、蕾数3～5で11月末に開花見込（11月5日調査）。オリエンタル系の品種では、二重被覆、無加温栽培を行っている。

4 トルコギキョウ

あわら市の種子冷蔵苗（購入苗）の定植は8月3日～5日に行われ、「サルサマリーン」とファルダ系品種は11月中旬でほぼ出荷が終了し、翌春収穫の二度切り作型を行う予定である。レイナ系品種、ロベラ系品種他は出荷初期から中盤である。大輪八重咲で3～4輪開花で出荷中である。温度の降下によるバイカラー系品種の色の流れ、滲みは見られない。

病害虫として、ヨトウムシ類（オオタバコガ）が部分的に中発生している。立枯病が部分的に発生（写真2）、灰色かび病は花卉に少発生している。

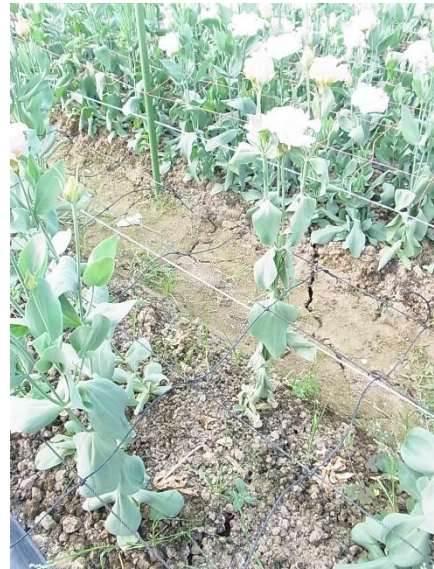


写真2 立枯病の被害（あわら市）

越前市では、11月15日の調査（昨年11月15日）で、9月中旬に播種された品種は、11月7日～14日頃に定植された。

5 ストック

坂井地区では、夏播き秋冬どりの作型のうち直播栽培では、アイアン系品種で8月7日播種のものが11月14日から出荷を開始している。アイアン系品種ホワイト、ピンク、アプリコットでビビフルF処理が1回行われた。直播は9月上旬まで行われており、11月下旬～12月上旬から、出荷が本格化する見込みである。本年度は出荷時期が鳥取、淡路と比べて差が小さく、長野からの出荷が継続しているため、出荷収量が全体に多くなっており、神戸市場では40円程度、福井市場でも60円程度と安値になっている。



写真3 シンクイムシの被害（あわら市）

移植栽培では、8月6日定植の「ホワイトコランダム」は出荷終盤、アーリーアイアン系品種のピンク、マリーンが出荷中から出荷終盤である。

病害虫としては、シンクイムシが少発生（写真3）、立枯病が少発生しているか、終息傾向で

ある。

10月25日にストック部会の現地研修会、11月14日にストック出荷に関する研修会（園芸カレッジ生対象）が行われた。

越前市では、カルテットシリーズが8月20日から9月20日頃にかけて直播された。11月15日の調査では、8月20日頃播種の品種・個体で草丈63 cmで収穫前期、8月末播種の品種・個体で草丈55 cmで蕾径9 mm、ピンチ作業中である。9月10日頃播種の品種・個体で草丈27 cmで、発蕾はまだである（11月15日調査）。

二州地区では、9月上旬播種・9月25日定植された品種・個体では、草丈40～50 cm程度に生育している（11月19日調査）。

病害虫としては、灰色かび病が少発生している。

若狭地区では、カルテットシリーズが栽培されており、9月上旬に直播された品種・個体では草丈が35～45 cm、10月中旬に直播された品種・個体では、本葉3対展葉になっている（11月19日調査）。

6 ハボタン

あわら市では、11月5日の調査（昨年11月16日）で、8月初旬に定植された「晴姿」が草丈65 cm（昨年75 cm）、「初紅」が草丈65 cm（昨年65 cm）で発色が始まっており、出荷開始は例年より早い見込みである。

福井市東郷地区では、11月15日の調査（昨年11月16日）で、「初紅」が61 cm（昨年65 cm）、「晴姿」が80 cm（昨年57～78 cm）であった。

目揃え会を12月10日に予定している。

病害虫として、アオムシの被害が少発生している。

福井市二日市では、11月15日の調査（昨年11月16日）でビニール被覆なしの雨よけハウスで栽培されている「晴姿」で、草丈39 cm（昨年49 cm）であった。

病害虫として、アオムシの被害が少発生している。

対策

1 ハウスの雪害防止

冬期間利用しないハウスは、栽培終了後できるだけ早く被覆資材を除去する。

冬期間利用するハウスは、降雪前に雪害防止対策を十分整えておく。大雪警報・注意情報等が発令された場合には、直ちに対応し被害防止に努める。

(1) ハウスの補強

積雪によるハウス倒壊を防止するため、丸太や竹等をハウス内に持ちこみ準備しておき、降雪が予想される場合は、3~4 m 間隔で支柱を立てハウスを補強する（写真 4）。

また、積雪荷重により肩部が左右に広がると倒壊しやすくなるので、ワイヤー等で引き付けておく。ワイヤー間隔が約 6 m 以上になると、ワイヤー間中央部ではその効果がほとんどなくなるので、支柱と同等の間隔で、支柱の間に張ることが望ましい。



写真 4 ハウス内の支柱の設置

(2) 屋根雪の滑落促進

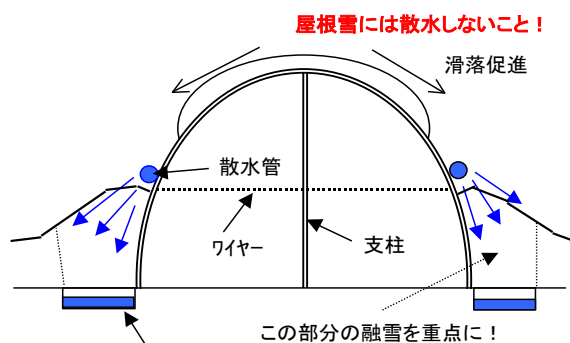
屋根雪はハウス内温度を 4℃以上にすると、ほとんどの場合滑落するため、加温機やストーブによる加温を積極的に行う。また、内張りカーテンがある場合は、カーテンを開放し天井まで暖かい空気が行き渡るようにする。

滑落しない場合は、手作業で強制的に滑落させ、屋根に雪を乗せたままにしない。特に、積雪による被覆資材のゆるみが直管パイプに引っかかって屋根雪の滑落を阻害するので、積雪が多くならないうちに人力で除雪しておく。特に、天窗は積雪しやすいので注意する。

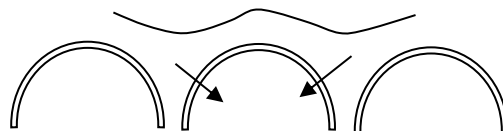
(3) ハウス周囲の除雪（写真 5）

滑落した雪がハウスのサイド部に積もった場合は、早期の除雪と散水による融雪を行う。なお、屋根部まで積雪してから除雪する場合は、ハウス両側を均等に除雪するようにし、片荷重によるハウスの倒壊を防ぐ。

除雪機を用いる場合は、ハウス周囲を整理して除雪機の通路を確保しておく。なお、効率的に除雪を行うには、いずれも積雪が多くなる前から稼動することが重要である。



ハウスの隣接間隔が狭い場合は、1棟おきに休作して被覆材を除去し、雪の捨て場を確保する





ハウスを覆うぐらいの積雪があった場合、肩部から除雪を始める。

写真5 ハウスの雪害対策と除雪

(4) 被覆資材を除去してあるパイプハウス

被覆資材を除去してあるパイプハウスでは、パイプ交点等に積もった雪が着雪し屋根一面に積雪するので、時々人力で雪を落としておく。また、ハウス肩部や腰部のパイプ等が積雪に埋没したままにしておくと、沈降圧によって変形、破損等の原因になるので、早めに掘り出しておく。

2 8、9月咲きギクの親株管理

(1) 親株の病害虫防除の徹底

1週間に1回の予防剤散布を励行する。苗床での防



写真6 黒さび病と白さび病
親株の葉裏にみられる

除は面積が小さいため、薬量を少なくして回数を多くする等、効率的に防除する。ただし、草丈が低い分、葉裏にかかりにくいので、丁寧に葉裏にかける。さび病等の病斑が隠れている場合があるのでよく確認する(写真6)。黒さび病には、ステンレス等で防除する。

(2) 越冬親株が過湿になると、株枯れや病害が多くなるので排水に留意し、過湿にならないよう管理する。

(3) 親株の切除は12月中旬までに済ませ、冬至芽の摘心は1月下旬に地際部より2~3 cm(葉3、4枚)を残して行い、折り取った茎葉は速やかにハウスの外に出す。特に防除前はハウス内の雑草を除去し、ダニ類、アザミウマ類等の隠れ場所をなくすようにする。

(4) 12月の親株切除後は、ただちに白さび病や各種病害虫に対する防除を実施する。特にダニ類やアザミウマ類はいったん生長点部分に入ると防除しにくいので、丁寧な散布を実施する。近年、紋々病(キクモンサビダニ)が見られるので、よく注意する。

3 スイセンの管理

(1) 灌排水管理(ハウス温度管理)

圃場に停滞水がある場合は排水対策を実施する。ハウス栽培で土壌水分が少ない場合は、灌水を行い、適切な水管理を行う。ハウスにあるスイセンでは日中は15℃程度になるように管理する。

(2) 収穫

花一輪2分咲きで適期収穫する。収穫後はすぐに水揚げを行い、しおれを防止する。

(3) ネットハウスは雪が付着するので、早めの雪対策を行う。

中柱として、パイプや孟宗竹、丈夫な垂木を3~4 mおきに設置し、ジャッキなどで突っ張り、補強管理を行う。上部はハウスと連結すると良い。積雪荷重によって肩部が広がると倒壊しやすくなるため、ワイヤーなどでハウスの肩を引き付ける。筋交いは建設時に設置し、降雪前に補強しておく。

4 トルコギキョウの育苗管理(3~4月定植もの)

(1) 近年は稚苗定植から大苗定植に移りつつあるため、育苗期間を長めに設定し、苗を12℃以下の寒さにあてないように管理する。5℃以下の寒さに長期間当たると生長点が弱り、側

枝が増加することがある。その場合、セルトレイは200～288 穴で深めのものを使用する。子葉展開後は灌水代わりに1週間間隔で液肥を施用するが、表土の一部にでも青ゴケ等がみられたら施さない。寒波が来た時も同様である。

(2) 10℃で5週間程度種子冷蔵を行うことで、発芽勢がよくなり、開花が促進される品種が多いので、早生品種をまく場合は冷蔵処理を前もって行う。

(3) 好光性種子であるため覆土はせず、底面吸水かミスト灌水を行う。ペレット種子を用いる場合は、ペレット資材を種子から取り除く必要があるため、軽く力を入れてペレットの被膜を割りながら播く。発芽後は底面灌水をやめ、細かいジョウロ等で頭上灌水する。また、灌水の水は地温の低下を防ぐため、溜め水したものを使う。

(4) 育苗温度は昼温20～25℃、夜温15～18℃として、夜間はトンネル等で保温する。場合によってはトンネル上に毛布やコモで保温する。

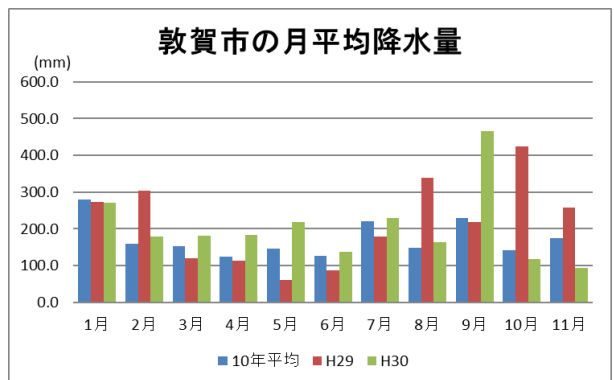
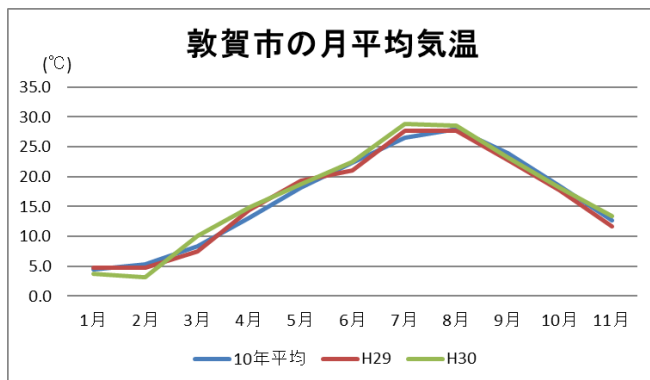
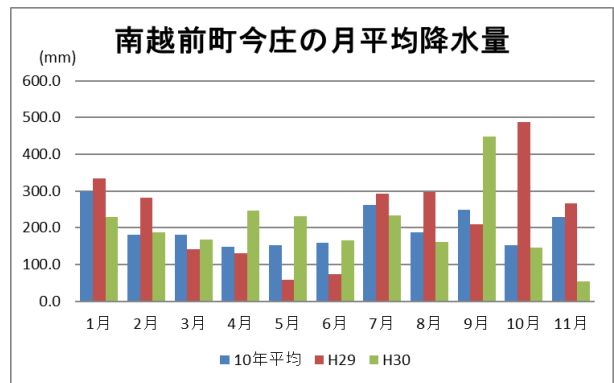
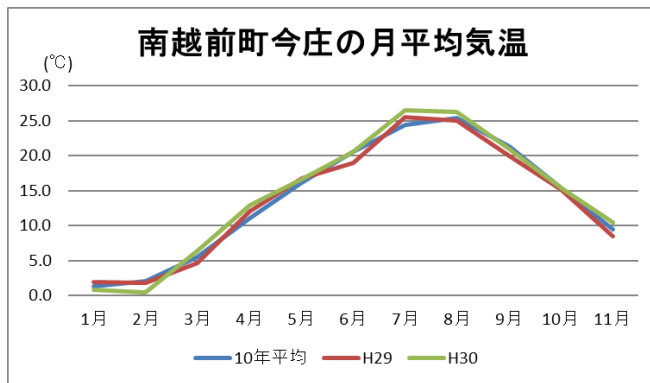
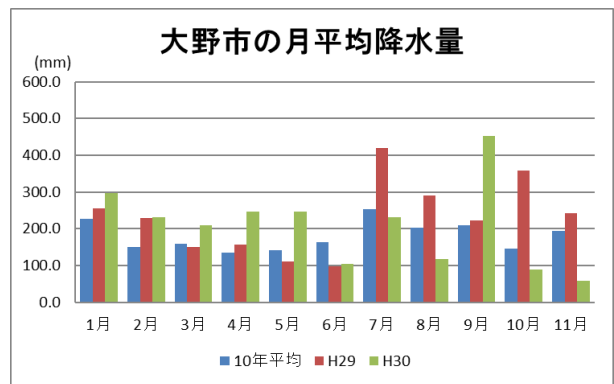
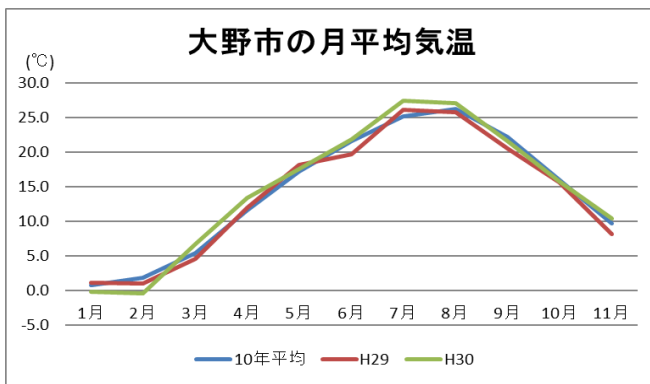
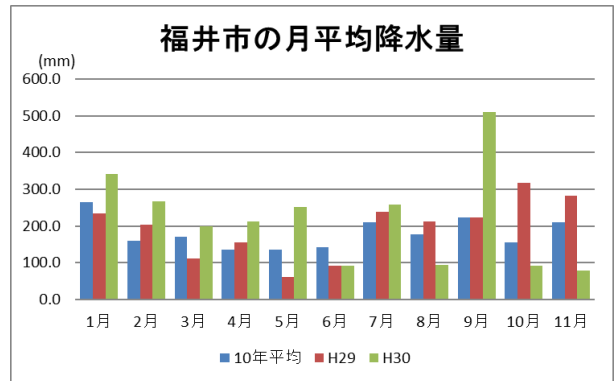
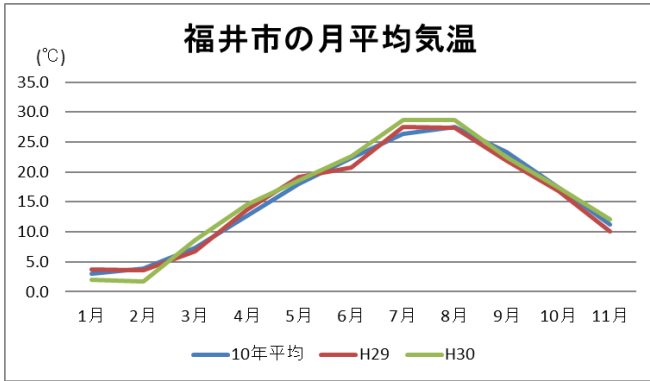
5 ストックの栽培管理

(1) 気温が下がってくると施設を閉め切りにすることが多くなり、多湿となりやすい。その結果、軟弱徒長となり、灰色かび病や菌核病といった病害が発生しやすくなる。厳寒期でも日中、晴れた日にはこまめな換気を行い、病害が起こりにくい環境づくりに努める。

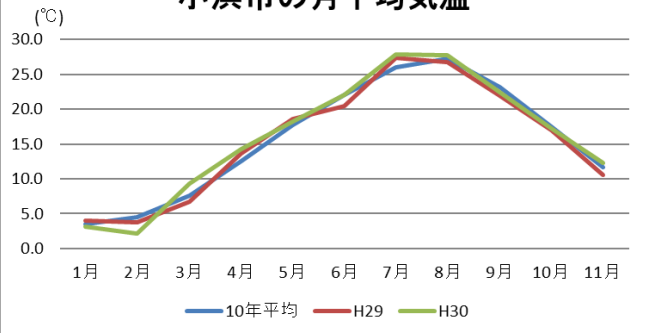
晴天が続かず、発生が懸念される場合は、早朝換気を行い、低温低湿度の空気を施設内に導入し、昼間昇温時の湿度を下げる工夫を行う。

(2) 灰色かび病や菌核病に対する治療剤は花き類やストックでは水和剤が多く、生育後期は葉斑による汚れが問題となるため、生育前半までにポリベリン水和剤(1000倍)などで防除に努め、生育後半は汚れが目立ちにくいフロアブル剤を使用する(例:アフェットフロアブル2000倍など)。

アメダスのデータ



小浜市の月平均気温



小浜市の月平均降水量

